

曲亭馬琴著

金毘羅船

利生續第

八編上

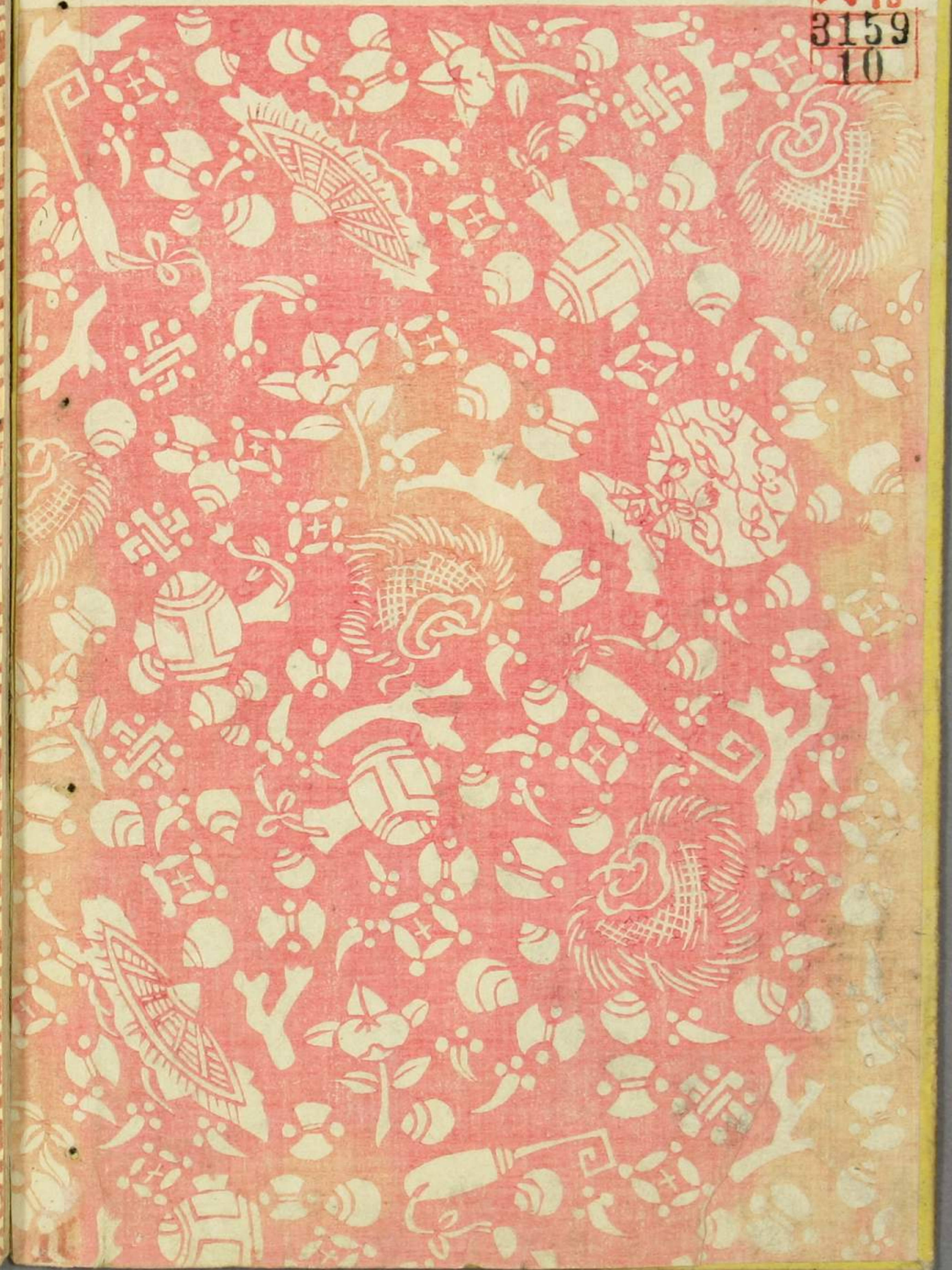
寶齋英泉画

13
3159
10



特

へ 13
3159
10



金田比羅船

第八編
上帙

馬琴作

英泉画

泉市版

西游の二書幻縁不可思議原何人の作を知らざれば陳元之の序
 何侯王の作といひ又尤侗もこれを序して丘長春の作といひ并み
 不吉と云ふ元史の止機傳の處より神仙と稱する尤侗が序の
 美論と云言皆華嚴經中より取れりとのものなりこの隱微を發明
 してその骨髓をのりたるも悟子陳氏が評微りせし書作の忠
 臣より知るやわんや看官悟らば讀る稀を金性談の巨擘とて相
 看く噴飯の充るものなりて吾々の策子と察するを彼書と剽竊摸擬
 あり。皇國の故吏縁のけり亦画虎類狗の壁京似れを婦幼論
 一易かるを言とまよとて繕くもの思惟よ今本編の説くを道士全真
 妖術とて烏雞王と稱すと三年后妃の太子も群臣も成相仕て疑はる

壹

假と真とを知りけん迷ひの玉石一とて認錯てより夫婦林檎を
 俱ふせむ母子亦胡越と形ふ至る月毫なるも疑はりける凡慮肉眼の然も
 わん彼號山の魔王の如天天眼通なるものも其の父と認めし假とて
 真とて看破るの遲は何ぞ口のその糸あはせて又孫行者の岩拆きその
 師の真偽を認め辨之呪文よと知れざる神通不測のはとて何ぞ
 必迷ふその水とてある故に故々たる個真如の月と心と失するものなり一切衆生邪
 魔外道とて這境境と解脱其初て佛子といふもの鳴呼西游の一書意味深
 長字々金玉と和解する原本越の四士面本集を第九編の折々を觀音
 ひる扉の半丁取入る序の切て作者の本心生地露して述ると信する

文政十四年辛卯春正月吉日新板 曲亭馬琴識



鳥糞國
王妃



日本ある
あやふし
親老を
子考ふ
詩の
海に

鳥糞國

鳥糞國
遅明太子

空は
雲は
月影の
光も

松原
の
家
の
待らむ

鳥糞國

岩折
白鬼
御導





愚好
えびまの
ゆくたの
かほ
ま

欺
け
福元翁

道士
全真



鳥雞王
三輪
菅環
乃
果
松
下

皇
宗

紅孩兒
彌山魔王

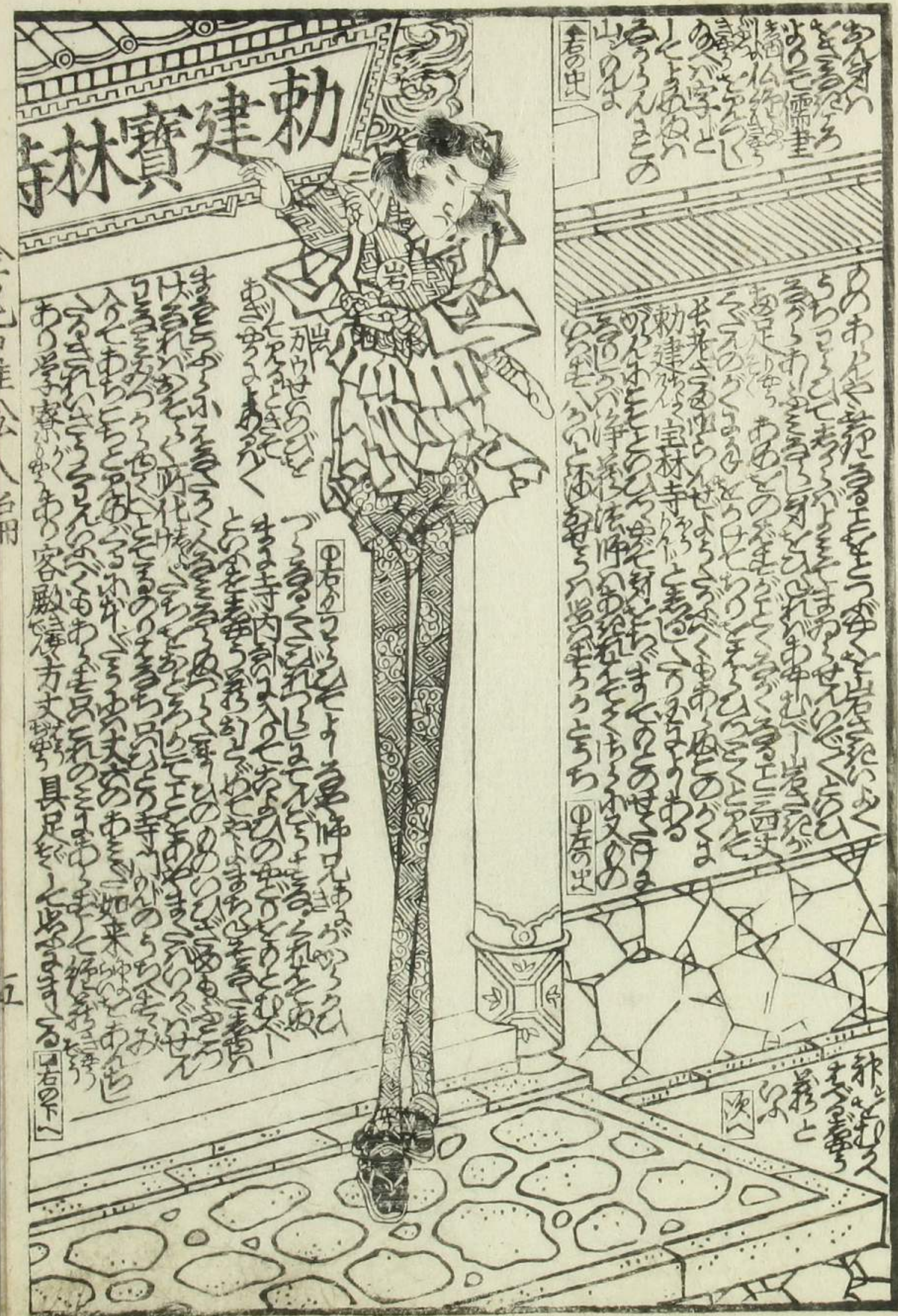


春來也
蹄の遠乃
このあま
ゆき
のち
とも
清らふ
なやま
里乃
終聖



岩折変體牛魔王

勅建寶林寺



たび僧大僧の徒... 金田村の船... 浄土宗... 舟渡り... 舟師... 舟客... 舟荷... 舟賃... 舟渡り... 舟師... 舟客... 舟荷... 舟賃...



浄土宗... 舟渡り... 舟師... 舟客... 舟荷... 舟賃... 舟渡り... 舟師... 舟客... 舟荷... 舟賃...

浄土宗の舟渡り... 舟師... 舟客... 舟荷... 舟賃...

舟渡り... 舟師... 舟客... 舟荷... 舟賃...

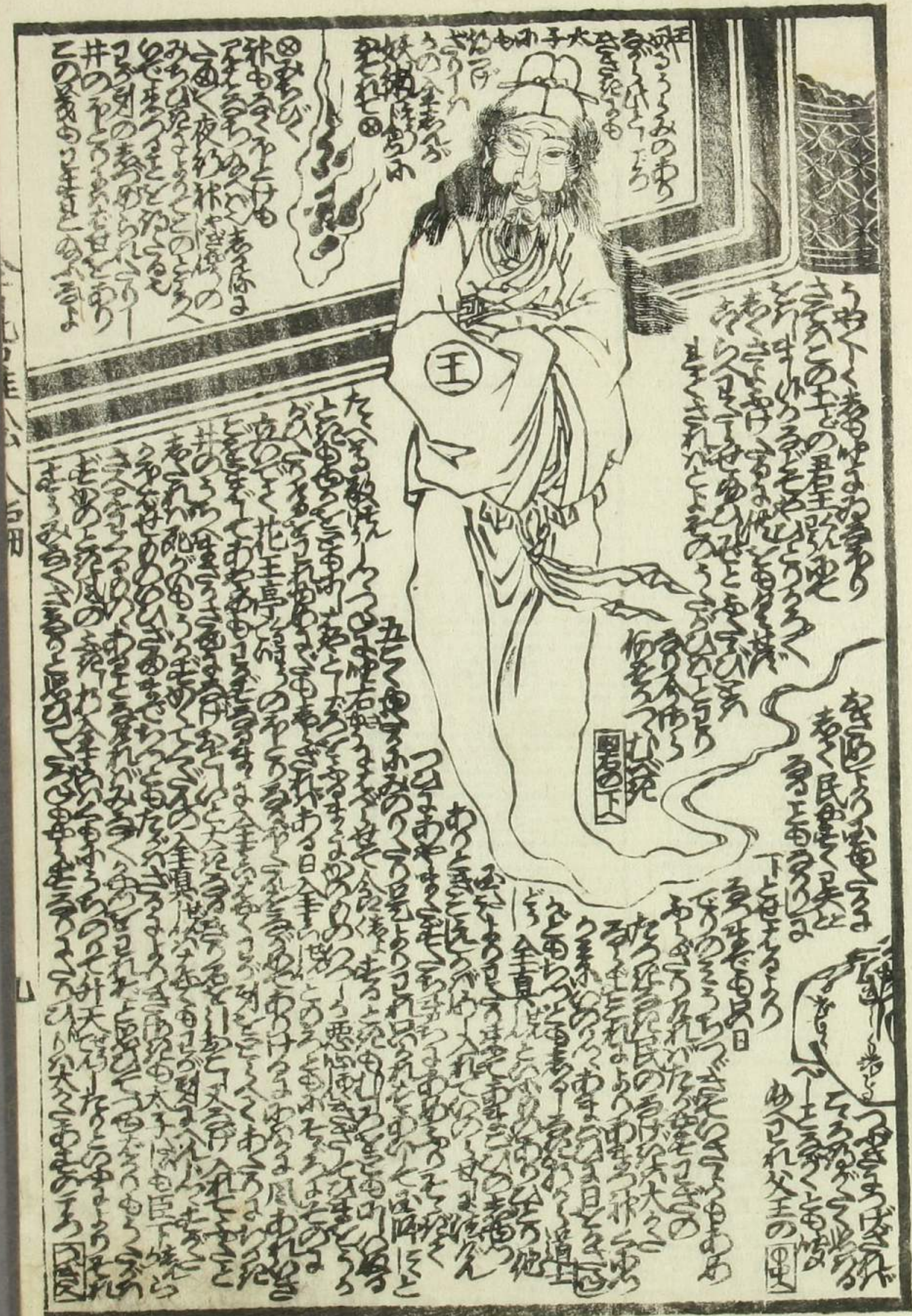




公田七 丑公 八 冊



公田七 丑公 八 冊





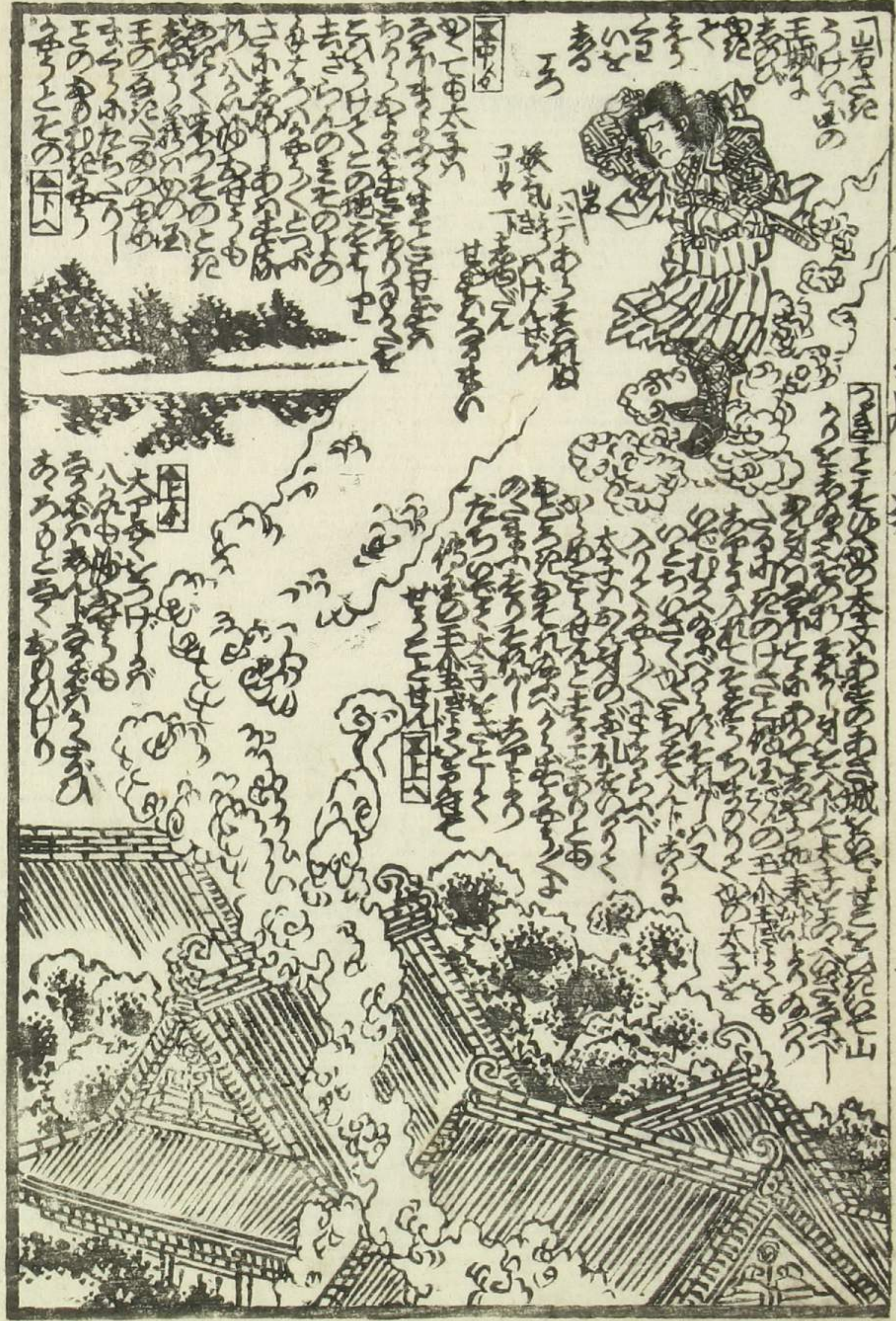
城に入ると... 大風... 王の金... 神... 玉... 山石... 金田羅船ノ編

山石... 金田羅船ノ編



城に入ると... 大風... 王の金... 神... 玉... 山石... 金田羅船ノ編

山石... 金田羅船ノ編



曲亭馬琴著

金毘羅船

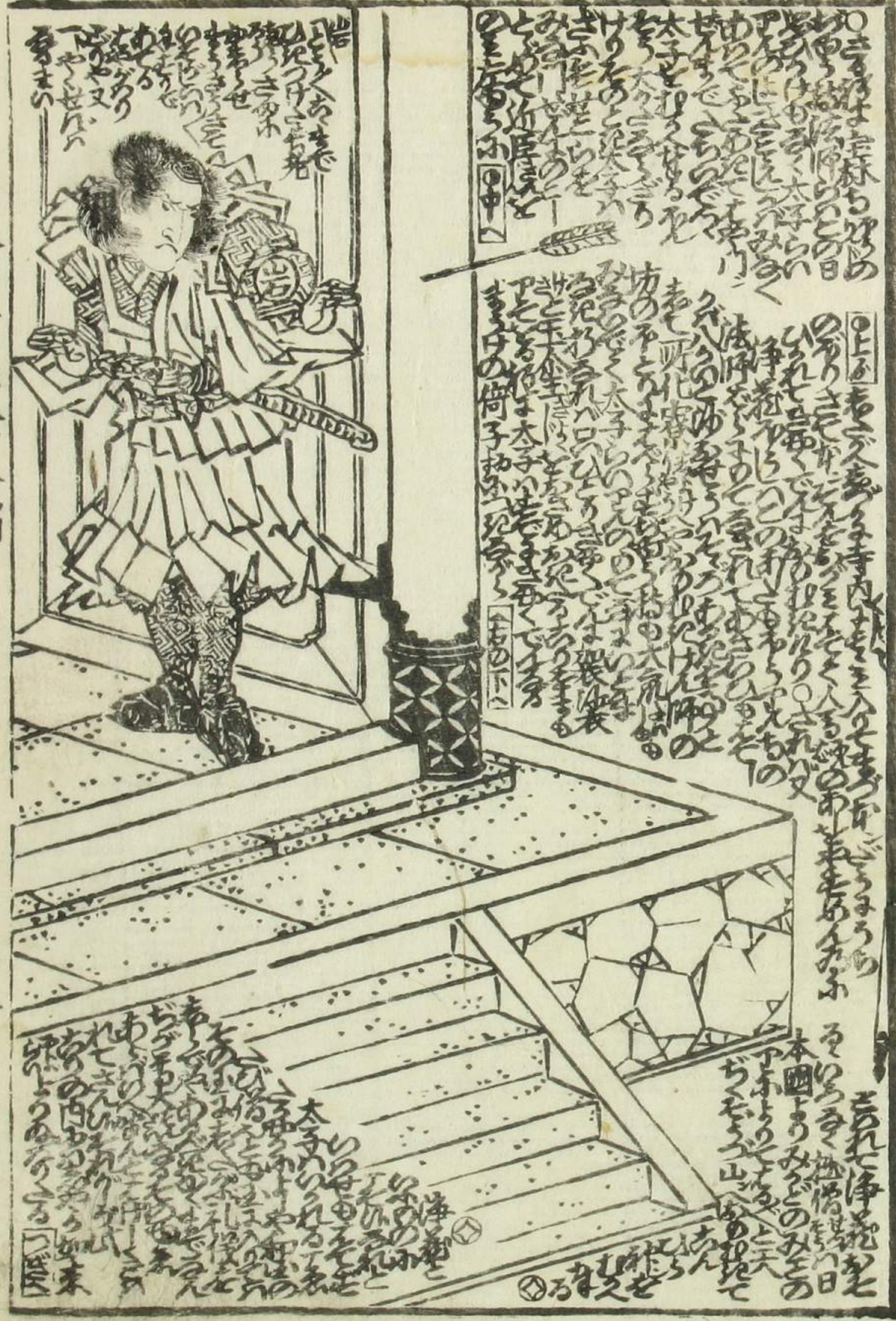
利生續第

八編上帙下

溪齋英泉画



全七冊公一冊



上野の山に
おぼろげな
月影が照らす
中へ

○上の
○上の
○上の

○上の
○上の
○上の



○上の
○上の
○上の

○上の
○上の
○上の





城中人々... 母... 後... 大... 右の左右

城... 王の命... 大... 母... 王の命



城中人々... 母... 後... 大... 右の左右

城... 王の命... 大... 母... 王の命



金毘羅廻船、編





めいしにわらわは... 徳川幕府の御用... 徳川幕府の御用... 徳川幕府の御用...



浄土の... 徳川幕府の御用... 徳川幕府の御用... 徳川幕府の御用...



東三輪明神道... 昌泰二年己未九月吉建... 徳川幕府の御用... 徳川幕府の御用...



その石出公の...
 これハ其城ノ...
 ...
 ...
 ...

家傳神女湯...
 ...
 ...
 ...



馬琴作

英泉画



